あなたに届くまで

菘多紀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
あなたに届くまで

【Ｎコード】
Ｎ２５１９Ｙ

【作者名】
菘多紀

【あらすじ】
両親を亡くした優香は叔父のすすめで全寮制の学校へ編入することになった。ところが、その学校、一風どころではないほど変わっていて……。
アメブロで連載中の作品を保存用として転載しています。
ｈｔｔｐ：／／ａｍｅｂｌｏ．ｊｐ／ａｋａｉｂａｒａｓｉｒｏｉｂａｒａ
「凪の海　暁の月」もよろしくお願いします。

第一章　1

『おじさま、お体の具合はいかがですか？
わたしは今、新幹線に乗っています。
篠田さんと、おじさまが勧めて下さった学校に向かうところです。
両親の葬儀以来、たくさんのご援助をありがとうございました。
今まで一度もお会いしたことがなかったので、父に兄弟がいたなんて全然知りませんでした。
直接お会いしてお礼を申し上げたかったのですが、入院中でお会いできないとお聞きしたので、こうしてお手紙を書いています。
葬儀のあとの手続きでは秘書の篠田さんに、とてもよくしていただきました。
大人の人がいないと分からない手続きもあったので、助かりました。
そういえば、転校の挨拶に行ったとき、篠田さんは注目の的だったんです。
みんな、篠田さんのことを「素敵なおじさま」だと、盛り上がっていました。とくに、隣の席だった佐野さんは、「転校じゃなくて、お嫁にいくんじゃない？」とか、とんでもないことを言ってくれたりしました。
田舎の学年一クラスしかない学校なので、みんな幼なじみのような家族のような人たちでした。お別れするのがとても辛かったです。
あ、でも、誤解なさらないで下さい。決して今度の学校に不満があるわけではありません。学費まで出していただいて、本当に感謝しています。
がんばって、新しい学校に早く慣れたいと思います。
ただ、成績表を見せて差し上げると、おじさまのご病状に障るかもしれませんので、それだけはご容赦ください。
どうかおじさまのお体が一日も早く快復なさいますよう、お祈り

しています。
ほんとうにありがとうございました。
東雲優香』

カーブを曲がりきった先の、目の前に広がった光景に、優香は息を呑んだ。
うっわあ。いきなりヨーロッパだ。
なだらかな山の間を切り開いたそこに、ヨーロッパのお城のような石造りの建物が並んでいた。
今までのどかな山の中をうねうねと走ってきたタクシーは、まっすぐにその建物に向かっている。
上品なアーチ状の正門は、タクシーが近づくと自動でゆっくりと開いた。
口が開いたまま閉じられなくなりそうだ。
「あれ……ですか？　鳳凰学院……」
「……学校案内によると、校舎はロココ調の宮殿をモデルに造ったとのことですね。なかなか豪奢ですね」
隣に座っていた篠田は、のんびりと穏やかな笑みで答える。
「校舎？　あれがですか？」
呆然としているうちに、タクシーは門をくぐって、敷地内に進んでいく。
左右対称に広がる庭園の向こうに、まるで舞踏会の会場のような白亜の宮殿が威圧感たっぷりに佇んでいる。こんな普段着で入ってもいいのかと、優香は自分の服装を見下ろした。これでも一張羅のワンピースなのだけれど。
学校には到底見えない。というより、あれが今日から自分の暮らす場所だとは信じられない。

第一章　2

ダークグレイの背広姿の篠田が、銀のフレームの眼鏡の奥から、思慮深い瞳を笑み混じりに細めて優香を見ていた。落ち着きを湛えた雰囲気で、年格好は四十歳くらいに見えるが、自称「まだ三十代」だという。

「まあ、たしかに、学校だなんて、言われないと分かりませんね」

「もしかして、とってもお金持ちしか行けない学校ですか？　貧乏人は帰れ、とか言われませんよね？」

篠田は手にした『鳳凰学院のご案内』という小冊子に目を向ける。

「……各種奨学制度もあり、幅広く入学生を募集しています、って書いてありますよ」

「でもでも。まさか、制服はマリー・アントワネット風ドレスとか言わないですよね？」

優香の脳内で、色とりどりの茶碗をひっくり返したような広がった裾のドレスを着た人たちが、軽やかにワルツを踊っている。

手元に口をあてて、おほほ、とか笑ったりするんだろうか。パンがなければケーキを食べればよろしいのに、とか言ったりして。バックに薔薇の花が飛んでたりして。

無理無理。こんなところで、生粋の庶民の自分にどうしろというの。

優香は困惑というより、得体の知れない不安がこみ上げてきて、顔を引きつらせた。

不安マックス状態だというのに、タクシーは建物の正面にきっちりと停まった。

「大丈夫ですよ。優香様。普通の学校ですよ」

篠田が柔らかく微笑んだ。

「旦那様のお話では、鳳凰学院はさほど学費は高くありませんし、卒業生は大半が公務員や会社員だとか。校舎が豪華なのはパティオ

グループがバックアップしているからでしょう」
「パティオグループって……あの？　学校まで持っていたんですか？」
日本経済の半分に関わっていると言われる巨大企業グループ。優香のような世情に疎い学生でも、パティオという名前のつく会社をいくつか知っているくらいに。
「ええ。才能のある優秀な学生を、優先的に傘下に入れることもできますからね。ですから、この学校には一芸入試システムも充実しています」
なるほど、そうしてチェックしておけば、優秀な人材を見いだせるということかもしれない。優香は納得した。
「では、まいりましょうか？　私がご一緒できるのは、事務室までですが」
少し心配が混じった口調に、優香は大きく頷いた。
「わかりました。大丈夫です」
根拠はまったくないけれど、優香はそう答えた。
篠田は優香が両親を失ったばかりだから、とても親身になってくれる。
だから、まだ会っていない叔父もきっとこんな風に優しい人だと、優香は思っていた。
これから、ここで一人の生活を始めるのだ。その最初から躓くわけにはいかない。
一人で大丈夫、にならなくてはいけないのだ。
「せっかくおじさまが薦めて下さったんですから、がんばってみます」
優香が無理をしているのに気づいてか、篠田は少し困ったような顔をして、そして、もう一度微笑んだ。

第一章　3

校舎の中は予想に反して近代的だった。天井が高いくらいで、普通の学校の校舎に見えた。

良かった。中までキラキラぴかぴかだったらどうしようかと思った。

事務室で引き合わされた上級生らしき女生徒は、紺色のジャージに身を包んでいた。

廊下で歩いている生徒達も、放課後のせいか、カジュアルな私服かジャージ姿だった。想像していた派手な服装の者はいない。優香は少し呼吸が楽になった気がした。

「女子寮長の幸島杏奈です。この学校は多少普通の学校とカリキュラムが違いますから、分からないことは何でも尋ねてください」

寮長と名乗った少女は、身長は優香より頭一つ高く、すらりと細身だが、鍛え上げたような体つきをしていた。おそらくは何かのスポーツをやっているのだろう。

微笑みを浮かべていても、気は抜いていないような油断のなさを感じさせる。黒いまっすぐな髪をきっちりと頭の後ろで束ねている。

「寮則などは冊子が置いてあります。それを読んで下さい。とりあえず部屋に案内します。女子は人数が少ないので、原則的に個室ですので……」

言いながら向きを変えた背中を追って歩き出したところへ、建物が揺れるほどの衝撃と爆音が響き渡った。窓から見える向かい側の校舎の奥から、黒煙が上がっている。

同時にけたたましい警報が鳴る。

『緊急放送。東ブロック北校舎三号室手前廊下にて爆発事故発生。規模はレベルC。校舎倒壊の危険はありませんが、北校舎一階の廊下は通行不能です。担当職員が現在消火作業中につき、北校舎一階廊下は通行不能。繰り返します……』

廊下を歩いている生徒達は、全く動じた様子はない。ちらりと窓の外に目を向けたくらいだ。
……何なの？　今のは。爆発事故？　レベル？　っていうか、誰も避難しないの？
優香はおそるおそる杏奈に尋ねかけた。
「……大丈夫……なんですか？」
「もちろんです。この程度なら、日常茶飯事です。自主消防設備も整っていますから」
……それはたしかにカリキュラム以前に普通の学校とは違う。
っていうより、そんなことが茶飯事って、どういうことだろう。
困惑して、足を止めてしまっているうちに、杏奈はかなり先まで進んでいた。
置いて行かれると思って、慌てて早足でそれを追いかけながら、漠然とした不安がずっしりとのしかかってくる気分になった。
何なのこの学校。編入試験も当たり前の学科試験で、さほど不思議な点はなかった。
変わってる、ってくらいじゃない気がする……。

「……大丈夫、か」
男は、冷笑まじりに、愛らしい花柄の便せんを無造作に丸めて、デスク脇のゴミ箱に放り投げた。
狙いが外れて、紙くずは正面に立っていた篠田の足下に転がり落ちた。
「お返事は出されないのですか？」
ゆっくりと丁寧な仕草で紙くずになった手紙を拾い上げると、篠田は非難がましいことは口にせず、それだけを尋ねかけてきた。
「病人がそんなことをする必要はない」
「しかし、ただお一人の姪御様でしょうに」
「ばかばかしい。姪と言っても、あの男の娘だぞ？　あの男が何をしたか……」

「でも、もう、お兄様は亡くなっておられます」
「だから、その娘で多少の意趣返しをするだけだ。逃げ出した父親に代わって、せいぜい苦労すればいい。鳳凰学院は普通の小娘の神経で耐えられるところではない。お前の役割は、『おじさま』がいかに期待しているかを言い聞かせて、学校から逃げ出せないようにすることだ。幸い、誰に似たのか義理堅い娘のようだし。……わかったな？」
篠田は黙って頭を下げて、部屋から出て行った。
一人になると男は、篠田が抗議するかのように机の上に置いていったしわくちゃの便せんに目を向ける。
初めて受け取った姪からの手紙。花模様の絵柄に、いかにも女の子らしい文字が綴られていた。
文面からしても真面目で素直そうな少女は、全く疑いもなく、善意で『おじさま』が全寮制の学校を推薦してくれたと思っているのだろう。
そうでないと知ったとき、どんな顔で自分を見るのだろう。
願ったことなのに、彼の心は今ひとつ浮き立たなかった。

第一章　4

寮室は、ベッドと机とロッカーがあるだけのシンプルな部屋だった。事前に篠田が発送してくれた段ボールが運び込んであった。
「荷物の片付けは一人で出来ますか？」
案内してくれた辛島杏奈が問いかけた。
「そんなにありませんから、一人で出来ます」
「そう」
一つ頷くと、杏奈はふっと表情を和らげた。
「この寮では自分の事は自分で、というのが基本です。思ったよりしっかりしている人で良かった」
「え？」
「もう二学期も半ばでしょ？　いい加減みんな慣れて落ち着いたところだから。そこへ入ってもらうんだから、どう扱えばいいか考えてたの。慣れるまでは大変でしょうけど、がんばって。他の生徒たちには食堂や共用スペースで会うこともあるでしょうから、軽く挨拶はしておいてね」
そう言うと、優香の肩に軽く手を置いて、立ち去って行った。
……慣れるまで大変って……。まだ何かあるんだろうか？
持っていたボストンバッグを置こうとして、机の上にある冊子を見つけた。
なにげなくそれを開いて、優香は唖然とした。
起床六時、点呼六時十分……食事六時二十分。
何これ、この十分刻みのスケジュール？　寮生活ってこんな感じなんだろうか？
それでも、ついていくしかない。
他に自分には行くところなんてないんだから。
……もう一日が終わったような気分。

翌朝、遅れる訳にはいかないから、と頭の中にたたき込んだスケジュールどおりに行動したのだけれど、朝食が終わるころにはすっかり気疲れしていた。

ありえないし、起床して二十分後だというのに、食堂にはきっちりと身支度した生徒がずらりと自分の席（食事の席も決まっているらしい）に並んでいた。入り口で戸惑っていると、寮長の杏奈が全員に優香を紹介して、席を教えてくれた。

女子生徒数はそんなに多くはない。三十人くらいだったが、全員が物差しでも背中に入っているかのように背筋が伸びていて、朝だからと眠たそうな生徒はいなかった。

すごい。なんかしっかりした人ばっかりだ。

夕食は時間がまちまちなので、名前の書いたトレイを受け取って好きに食べていいという話だったが、朝は全員揃って食事、が規則なのだという。

……こんなに緊張してご飯食べたことないかも。

優香はそう思いながらも、ほとんど話しかけられることもなく、食事を終えたのだった。

そして、まずは職員室に向かうべきだろうかと校舎棟の前で迷っていると、一人の少年が優香に歩み寄ってきた。

第一章　5

「ええとー、シノノメユウカさん？」
力の抜けたような、というより、力があるんだろうか、という声。
……地縛霊？
優香は思わずそんな失礼な印象を抱いてしまった。どことなく存在感が薄くて、風が吹いたらどこかに飛んでいってしまいそうな雰囲気の持ち主だった。
上品な細面で色白の少年は、力の入っていないへろへろした声で、自己紹介してくれた。
「僕は一年一組のDグループのリーダーで、早見夕樹と申しますー。どうかよろしく。職員室までご案内しますー」
「はい……よろしくお願いします」
思わず頭を下げようとすると、相手は手のひらを目の前でひらひらさせた。
「堅苦しいのはナシにしましょー？　東雲さんは、Dグループに入ることになっていますので、僕がお世話をいいつかりましたー」
この学校のカリキュラムで一番特殊なのは、グループ制というシステムだった。
生徒は四、五人のグループを組み、選択授業をのぞいて、すべての活動をその単位で行う。そのグループの評価が成績評価にも関わるというのだ。メンバーは一年間替わることはない。
毎月ランキングが発表され、上位グループは当番免除など優遇されるらしい。
職員室で担任教師に挨拶すると、相手は複雑そうな顔で「まあ、がんばれ」とよくわからないことを言ってくれた。
教師というより、夜店で焼きトウモロコシを売っていそうな若い教師は、すでに秋に入っているというのに、アロハシャツと半ズボンとビーチサンダル姿だった。

「分からないことはグループのメンバーに聞いてくれ。基本的にうちの学校は生徒任せなんだ。ただ、セクハラとか、暴力とかは教師の管轄なんで、報告してくれ」
「わかりました。あの、一つ伺っていいでしょうか？　先生の担当教科は何ですか？」
担当教科というより、本当に先生なんだろうか。
そう思ったが、相手はむしろ人なつっこい笑顔で答えた。
「オレは格闘技射撃コースの教師だ。うちを選択するんなら歓迎するぜ。っと、そういえば選択科目の届けがまだだったな。来週までに出してくれると助かる。見学したい科目があったら、そいつに案内を頼むといい。校舎が広いから、慣れないと遭難するからな」
遭難？　たしかに敷地面積は普通の学校よりはるかに広そうだった。校内のあちこちにレンタサイクルが設置してあったりするのも理解できるほど。
それにしても、格闘技？　射撃？　そんな教科まであるんだろうか。
教師は時計をちらりと見てから、ノート片手に腰を浮かせた。
「早見、今朝は職員会議があるから、彼女を教室に案内してくれ。どうせ午前はグループ活動だから、クラス全員に引き合わせるのは無理だろうし」
「あいあいさー。ガッテン承知の助三郎ー」
なぜか敬礼して答えているが、口調は脱力感いっぱい。
「じゃあー。行きましょうか」
彼は、へなっと力の抜けた笑みで、優香を見た。
「……肩の力は、抜いてね」
そう言われて、優香は緊張していたことに気づいた。
彼は優香が気を張り詰めているのを知っていて、笑いかけてくれたらしい。

第一章　6

「……飼育係ですか？」
「うん。いきなりで悪いけど、今月、うちのグループが飼育係になってるんだ」
並んで教室に向かいながら、早見夕樹は説明してくれた。
現在、優香の所属することになるＤグループの仕事は飼育係、なのだそうだ。
「一番ポイントが少ないグループが、雑用専門っていうか。仕事は日に一度飼育小屋に行って、小屋の掃除とかえさの在庫チェックとかするんだけどね……。僕は今日、用事があるから無理だけど、他の連中が手伝ってくれるからね」
「飼育小屋ってことは、動物を飼っているんですね。ウサギとか……？」
優香の通っていた小学校には飼育小屋があった。インコやウサギがいたような気がする。
けれど、高校で飼育小屋、というのは少し珍しい気がした。
「……ウサギって……いたかな？　毛色がウサギっぽいのは居たかも……」
夕樹は首を傾げて、深刻な顔をする。
「え？　じゃあ、ニワトリとか……？」
「ニワトリ……みたいなのはいるけど……大きさが違うしー」
悩んでいる。一体、どんな動物を飼っているんだろう。
けれど、基本的に動物が嫌いではない優香は、それ以上訊かなかった。あとでどうせ目にすることになるのだから。
Ｄグループは現在男子四名。リーダーがこの早見夕樹で、南暁彦、殿田イサキ、三宮青龍という名前だと教わった。
「みんな、女の子が入るからって張り切ってるよー」
夕樹はへらへらした口調でそう告げる。生命感に乏しいというか、

変というか。
この人、朝ご飯、ちゃんと食べたんだろうか。
優香は全く別のレベルの心配をしていた。

教室で紹介されて、初めて引き合わされたメンバーは、共通してどことなく変だった。
「オレ、殿田イサキ。何でも分からないことがあったら聞いてね？」
「オレは南暁彦。嬉しいなあ、野郎ばっかりのグループなんて飽き飽きしていたところだよ。まるで救いの女神に見えるよ。何でも頼りにしてね」
イサキと暁彦はそろってにこにこ笑いながら言う。いたずらっ子がそのまま高校生になったような風貌のイサキと、軽薄そうな柔和な顔にナンパな口調の暁彦。見た目は全く印象が違う。
夕樹が一拍置いてから、ため息をついた。
「ええとね。一応言うけど、他のことはともかく、この二人に勉強のことは聞かない方がいいよ。赤点大魔王と補習大明神と言われてるから」
やんわりと抑揚のない口調で、手厳しいことを言う。二人はまったく怒る様子はない。
ってことは、多分本当のことなのだろう。
夕樹はそれから机に両脚を載せて、不機嫌そうに外を睨んでいる生徒を指差した。
「それと、窓際で不満そうな顔してるのが、三宮青龍。勉強の成績はいいけど、人間関係の構築には失敗してるっていう困った人……一匹狼気取りっていうのかな？」
……聞こえるって。絶対それ、聞こえてるって。
優香はひやひやしながら、相手と夕樹を見比べたが、予想した事態にはならなかった。
こちらの会話は聞こえているんだろうに、三宮青龍は顔をこちらに向けもしない。

怒ったり突っかかったりしてくるのならまだしも、無視ですか？
ずいぶんな非友好的な態度だ。
見れば、どこの王子様かと思うほど、品のいい整った顔をしている。細面に高い鼻梁、鋭い刃物のような光を帯びた褐色の瞳。
外見はともかくとして、その雰囲気はいただけない。寄るな触るなという、ぴりぴりした空気が周囲を漂っているのだ。
ハリネズミのような人だ。優香は内心そう思った。
……せっかくかっこいい顔しているのなら、笑えばいいのに。もったいない。
転校生というのは、珍しいイベントの一つだというのに、こちらを見ようともしない。
「……まあ、彼のことは気にしなくていいから。あいつは誰彼構わずまんべんなく公平にああいう態度だから」
ちっともフォローになっていない。優香は何と答えていいものか悩んでしまった。
そして、夕樹はメンバー全員を見回して、さらに巨大な爆弾を投げ込んだ。
「あ。それとね。午前中はグループ活動の時間だから。本日は、第二体育館のワックスがけと、グラウンドの草むしり。ジャージに着替えて下駄箱に集合」
全員がげんなりとした顔をした。窓際にいた青龍も、心なしか眉間の皺が深くなったような気がした。
「……それが授業なの？」
「そう。れっきとした授業だよー」
夕樹はそう言って笑う。
……やっぱり、この学校ってずいぶん変。
優香は改めてそう思う。

午前中いっぱいをワックスがけと草むしりで終えて、午後は普通の授業が行われた。

けれど、どことなく他のグループの生徒達は、夕樹たちDグループに対して冷淡に見えた。逆に優香に対しては同情的な態度だったが。

「よりによってあのグループに……」

そういう言い方はないだろう。優香は午前中のグループのメンバーの言動を見ていて、青龍はともかく、三人とも個性的だが、嫌な人たちではない、と思っていた。

途中編入という立場の優香に気を使ってくれるし、仕事もちゃんと教えてくれた。

……まあ、青龍って人はややこしいけど。なにしろ、仕事はするのだが、全く協調性はない。遠く離れた場所で、黙って草むしりをしていた姿が目に浮かぶ。

どうやら、Dグループは問題児揃いという評価らしい。

そんなことない、と言えるほど、彼らを理解できてないので、優香は返答に困ってしまった。

第一章　7

一日の授業が終わると、夕樹が飼育小屋までの案内がてら、学校内の施設を説明してくれた。
鳳凰学院は四つのブロックに別れていて、高等科と中等科は南ブロック、大学は北ブロック。体育館やグラウンドは西ブロック、研究施設が東ブロック。
「東の第三ブロック北校舎にある研究棟は、ヤバイからね。用事がない限り、特に北校舎に近づくのは止めた方がいいよ」
「爆発するから？」
優香が訊ねると、夕樹は、ピンポーン、と力なく言いながら笑う。
「あそこで爆発物処理とかの実習もするから。まあ、ホントに危ないことする時は、事前に避難通告があるからいいけどね」
そんなことやってるのか、この学校。
優香は昨日目を通した学校の規則やら案内の書類に、緊急避難の仕方やら、万一の場合の対処法が事細かに書かれているのを見て、ある程度察していたつもりだった。
普通は、核シェルターの使用法や、病原菌汚染の注意書きまでは書かれない。
授業や校内の様子自体は、さほど風変わりには思えなかった。制服も普通の紺色のブレザーだったし。
「東雲さんは、選択授業はどうするの？」
夕樹に訊ねられて、優香は持っていた書類にもう一度目を向けた。担任教師にも言われたけれど、その選択授業というのが困りものだった。
この学校は授業の大半が選択授業とグループ活動にあてられている。その選択授業のリストも凄かった。生徒の数以上に授業の選択幅があるなど、普通ではない。
「まだ考えてない。こんなに沢山の選択授業なんて、初めて見た。

体育系に法学、看護……軍事？　外国語……」
「選択するっていうより、そういう特性のある生徒が入ってくるとコース作って対処するって感じだからねえ……。クラブ活動と思って、気楽に選べばいいよ」
なるほど。部活動の一環くらいに考えれば、やってみたい教科を選べばいいのか。
優香はそれなら美術芸術コースの中から選ぼう、と考えた。絵を描くのは好きだから、絵の道具だけは寮に持ってきているから。
ふと、夕樹が顔を上げた。
「あ、そっちの大きな建物が飼育小屋だから」
夕樹が指差したのは、かまぼこ型の屋根の、巨大な鉄工所のような建物。西ブロックと東ブロックを分断する道路のすぐ脇にある。
「……小屋？」
飼育小屋、というのはもっと慎ましやかな建物だと思っていた優香は、確認するように指をさした。
「うん。一応。入り口に道具とエサがおいてあるから。これは一応注意書き。あとは他の連中が来るはずだから、教えてもらって一緒にやってね。これは、飼育係用の物品庫の鍵」
そう言うと、夕樹は鍵を手渡すと、他の校舎の方に歩き出した。
優香は漠然と不安を抱いた。

第一章　8

巨大な鉄の扉には太い鎖で鍵がかけられていた。その隣に普通サイズのドアがある。ドアには危険、近づくなという表示がいくつもしてある。

手渡された紙に書かれている文字に、一度目を向けてみた。

『注意書き。すべてのドアにはロックがかかっています。小さいドアが通用口で、出入りは原則そちらからしましょう』

「……」

入り口の脇に飼育係用、と書かれた部屋があって、その周囲に肥料の袋を思わせる大きな袋が山積みにしてあって、マジックペンで「エサ」と書かれていた。

時間厳守、と張り紙をされた部屋の中には、まるで宇宙服のような銀色のスーツと、スタンガンや銃が入っていた。

「……これ、本物の銃？」

入っていても、せっかくだけど、使い方分からないし。いったい何に使うの？

『原則単独行動禁止。武器携行の者と二人以上で入ること。油断は禁物。麻酔銃の残弾数は必ず確認のこと』

『背を向けてはいけない。奴らはこっちの隙を狙ってくる』

……飼育係の注意書き、だよね？

優香は首を傾げたまま固まってしまった。

周囲を見回しても、誰もいない。青龍はともかく、暁彦とイサキが来るはずだと夕樹は言っていた。この部屋の鍵は優香が持っているし、スーツや道具はフックの数に隙間なく並んでいるので、すでに中にいるとは考えにくい。

来るまで待とうか、そう思った瞬間、建物の中から爆音にも似た音が聞こえてきた。

「……？」

これ、もしかして、中で飼っている動物の声？
食事の時間が近づいているなら、飢えて騒いでいても不思議ではないが、一体何の声なんだろう？
お腹を空かせているのなら、可哀想だし。
優香は中の状況を確かめるべきだろうか、と思いついた。
通用口の鍵は、物品庫の中にあった。単独行動は禁止、という言葉を思い出したが、見るだけなら、と鍵を握りしめた。
ドアを開けて、その脇にあった電気のスイッチを入れた。そうして、一瞬言葉を失った。
目の前にあったのはいくつも並ぶ見上げるような高さの巨大な檻だった。その中を数頭の生き物が落ち着き無く歩き回っている。その生き物はそれぞれ奇怪な容姿をしていた。
トカゲに似た鱗に覆われた身体、その背丈はキリンよりも大きい。
その隣には羽毛のような毛に覆われた蛇のような生き物がのたうっている。その胴体は優香のウエストの数倍はある。
そうした生き物たちを見て、優香は恐怖よりも、自分の正気を疑いたくなった。
ありえない。
ドラゴン？　恐竜？　なんなのこれ？
しかし、相手は食事を待ちかまえていたらしく、優香を見て、檻に身体を押しつけるようにして、吠えかかってくる。
『中の生き物はとても大型です。肉食のモノもいますので、うかつに檻の傍に近づいてはいけません。特に長い爪を持つ種類のヤツの傍には、エサを置くときも決して油断しないでください……エサのやり方は……』
注意書きには、決して中の生き物がウサギやインコのような平和な生き物だとは書いていない。
これは、現実だ、と理解したとたんに、優香は身体が震えた。

第一章　9

三宮青龍は、学生寮への帰り道、ふと、掲示板に張り出された追試予定者のリストに目を留めた。
殿田イサキ、南暁彦、おなじみの二人組の名前がある。おなじみすぎて、驚きもしない。
追試予定日は、今日の午後四時から六時。
「……」
早見夕樹は、今日の放課後、実習で出かけると聞いていた。
ということは、あの転校生は、誰と飼育係の仕事をするつもりなんだ？
「……って、オレか？」
冗談ではない。自分が今までそうした係など一度も加わったことなど無いのは、彼らだって承知しているはずだ。
ただ、彼らがお互いに、飼育係の仕事が出来ないことを知らずに、彼女を飼育係の仕事に送り出したら？
青龍は眉根を寄せた。
「……ったく、面倒臭ぇ……」
一応様子は見ておいたほうがいいだろう。死なれると面倒だし。
青龍は来た道を引き返した。
普通の女の子なら、あの中の生き物を見ただけで、パニック起こして逃げ出すだろう。
だから、そうしてくれていれば問題ない。

『おじさま、お加減はいかがですか。
無事に転入手続きは終わりました。クラスの人たちは優しそうな人ばかりです。
グループ分けはDグループになりました。わたしのほかはみんな男の子で、それぞれ性格も雰囲気も違う個性的な人たちです。

今日は飼育係の仕事を教えてもらいました。鳳凰学院は、大きな動物を沢山飼っていて、立派な飼育小屋があるんです。当然エサも沢山食べるから、運ぶのは大変です。

でも、喜んで食べている動物たちを見ているととても幸せな気分になりました。

ただ、ちょっと疲れてそのまま外で寝入ってしまったみたいで、気がついたら保健室に連れてこられていました。誰が運んでくれたのかは分かりませんが、初日から人様にご迷惑をかけたのではないかと、心配になりました。

外部活動、という授業があって、来週は外で行われるそうです。

まだ詳しい話は聞いていないのですが、なるべく早く慣れようと思います。

おじさまもお体を大事になさって下さいね。

『東雲優香』

翌朝、教室にはいるとすぐ、男三人がそろって深く頭を下げてくれた。

「ごめん。昨日、連絡不足で。彼らが昨日追試受けてるなんて思わなくて。オレは別件で動けなかったけど、後で分かって。……大変だったよね？」

「いじめとかじゃないから。ホントごめん」

優香はやっとのことで、飼育係のことだと思い当たった。

彼らは故意に優香ひとりにさせたわけではなく、お互いの用件を確認していなかっただけだったのだ。

「大丈夫。私、力仕事得意だし」

優香はそう答えた。三人がそろって目を丸くした。

「だって、アレ、見たんだよね？　怖くなかった？」

「オレたちだって、飼育係が回ってきたら、円形脱毛症になりそう

な気分なのに」
「……」
たしかにあそこの生き物には驚かされた。
ただ、何とかエサを配らないと、という事に必死で、怖いことが二の次になっていた。

第一章　１０

「あそこの動物はどっかの研究所がやった違法な実験の産物なんだよ。詳細は知らないけど、殺すのも可哀想だからって、うちの学校の理事長が保護したんだって噂だよ」
「ああ……」
だから、図鑑には絶対載っていないような動物だったのか。優香は納得した。
やっぱり、普通の生き物ではないらしい。
十数メートルの体高を持つライオンの顔をした虎とか、十メートルを超す翼を持つ蛇とか、見たことのない生き物ばかりだった。
「でも、最初は怖かったけど、人なつっこいところもあったけど。『ちょっと待ってね』って言ったら、檻に体当たりするの止めてくれたし。ちゃんとお座りして待ってたのよ。特にあの白い鳥の羽根のついた蛇さんは、大人しくていい子だった。知らない人が入ってきたら、向こうだってびっくりするよね。だから、餌をくれる人って分かってくれたと思うけど」
優香がそう言うと、男達は、引きつったような顔をした。
「ありえない……ぜったいそれ、ドリーム入ってるよ」
「そう……かな？」
優香は首を傾げた。
とはいえ、自分は昔、ご近所で恐れられていた猛犬を唯一恐れなかった子供だったし、動物に噛まれたり襲われたこともない。
「じゃあ、今日の放課後、もう一回やってみればいいよね？」
優香は自信を持ってそう言ったのだが、三人は呆然とした顔で言った。
「東雲さんって……やっぱり、普通の子じゃなかったんだ……」
「やっぱ、うちの学校に来るような女の子だしー」
「だよなあ……」

優香は首を傾げた。
「どういう意味？　この学校って、そんなに変なの？」
自分でもうすうす変だとは思っていたが、他の生徒達からそれを聞く機会がなかった。
夕樹が不思議そうに優香を見た。
「だって、ここは、パティオグループが国の委託を受けて、特殊能力を持つ学生ばかりを集めた学校だよ？　通称、正義の味方育成機関。普通の人間が誰一人いない学校だよ」
「はい？」
「この学校の生徒は一芸に秀でた者ぞろい。将来、刑事事件の捜査とか、要人の護衛とか、国家政策とかに協力できる人材を集めているんだよ」
そんなの聞いてない……っていうか、そんな学校があるなんて知らなかった。
「……もしかして、知らずに編入してきたの？」
イサキが問いかけてくる。優香は頷くしかなかった。
「だって、両親が死んだから、寮のある学校がいいんじゃないかって、叔父様が薦めてくださったのが、ここだったから」
「へえ」
「全寮制の学校ならもっとフツーのところがあるだろうに……」
夕樹がぽそりと言う。
「だよねえ。最初見たとき、ちょっとびっくりしたよ。この学校の女子はとんでもなく強い人多いからねえ。ずいぶんとスパルタな叔父さんだなあ」
暁彦が頷く。優香は大きくかぶりを振った。
「そんな」
両親を失って途方に暮れていたとき、叔父の秘書篠田が現れたとき、救世主かと思ったくらいだ。
書類の手続きも言われるままに必死で書き込むだけで、何をしなければならないのか、何をするべきなのか、全然分からなくて。

「……きっといい人だと思う。ご病気だとかでお会いできないんだけど」
「病気なんだ。それは大変だなあ。もしかして、うちの学校の外の評判だけ聞いて手続きしちゃったのかもしれないなあ。でも、試験に通ったくらいだから、東雲さんはただ者じゃないはずなんだけどねー」
そこまで言ってから、夕樹が思い出したように言葉を句切った。
「そういえば、選択科目、どうするの？」

第一章　１１

「とりあえず、芸術関係のコースをいくつか……あと一つ埋まってないんだけど」
　優香は鞄から記入してきた用紙を引っ張り出した。鉛筆画とＣＧの科目を選んだのを見て、夕樹が頷いた。
「鉛筆デッサンのコースなら、暁彦も取ってるからね。絵が得意なんだっけ？」
　それを聞いて暁彦がひょこっと顔を向けてきた。
「え？　どんなの書いてるの？　見たい見たい」
「……」
　優香は戸惑った。たしかに絵を描くのは好きだし、美術の先生にデッサンはほめられたけど、自由に描いた物は何故か一様に絶句されるのだ。
　多分、ボタニカルアートに影響を受けたのが原因だと思うのだけれど。
「……驚かない？」
「何？」
　仕方ない。見せない限り引かなさそうな暁彦の表情に、優香は鞄からスケッチブックを引っ張り出した。
　嬉々としてそれを受け取って開いた暁彦が、そのままフリーズした。
　……あー、やっぱり。
　優香はそう思ったが、脇から覗き込んだ夕樹が軽く目を見開いた。
「これって……妖怪？」
「妖怪の絵をね……リアルに描いたらどうなるかなーって……」
　奇妙な間を置いて、わずかに引きつった笑みが返ってきた。
「うん……リアルだね。っていうか、リアルすぎてすごく怖いんだけどこの絵」

「……やっぱ、東雲さん、うちの学校に入れるわけだ……納得した」
「え？」
どういう意味なの？　そう思ったけれど、とりあえず悪口ではなさそうだと自分で納得することにした。
夕樹が不意に思いついたように、顔をこちらに向けてきた。
「ね。あと一つ選択科目が取れそうなら、僕の入ってるところに来ない？」
「え？　何のコースですか？」
「犯罪学のコースでね、プロファイリングとか習ってるけど、君、モンタージュづくりとか興味ない？」
モンタージュ。犯人の手配書とかに使うあれ？
それはすごく正義の味方っぽい気がして、優香はどきりとした。
興味あるけど、難しくないんだろうか。
……でも、この一風変わった学校に早く慣れるためには、尻込みしていたらダメだ。
「似顔絵的なことですね……？　やったことないけど、できるかな」
「うん。そんだけリアルに描けるなら、似顔絵とかモンタージュの才能あると思うけど」
「……じゃあ、それにします」
そう答えると、夕樹が嬉しそうに頷いた。
風が吹いたら飛んでいきそうな夕樹が、プロファイリングというのも予想外だったけれど、この学校の生徒は何か突出したものを持っている人たちなのかもしれない。
見かけと違うとか、イメージで考えちゃダメなのかも。
ふと、相変わらず少し離れたところで本を親の仇みたいに睨んでいる青龍が目についた。
この人も……何かきっとすごい人なんだよね。
優香がそう納得しようとしたとたん、青龍がふと目を上げた。

第一章　１２

「青龍。お前その目、超マジ怖ぇ。ごめんねー、東雲さん。こいつ昨日どっかでコンタクトレンズ落としたらしくて、機嫌悪いんだ」
「……」
コンタクト？　もしかして、すごい目で睨んでる、と思ったのは、コンタクトが無くて見えにくかったせいなんだろうか。
「放課後帰ってくるの遅いから、女子でも口説いてるのかと思ったら、何かにぶつかって落としたんだって―。眼鏡はどうしたんだよ？」
「寮に忘れた」
ぼそっと不機嫌を隠す気のない声。
「青龍―。そんなだから顔だけの残念王子だって、女子から言われるんだよ」
どうやら、青龍の方は人を寄せ付けたがらなくても、暁彦や夕樹は彼と距離を置いているわけではないらしい。
というか、思ったよりは仲がよさそうに見える。
夕樹が苦笑いを浮かべた。
「ああ、言ってなかったけど、男子寮は四人部屋でね、基本グループごと同室にされるんだ。だから、お互い気安いといえば気安い関係なんだよ」
「……いいなあ……」
優香がそう呟くと、相手が驚いた顔をした。
最初に言葉を返してくれたのは暁彦だった。
「そっかー女子寮って個室だよね。じゃあ、ケー番交換しない？」
「あ、そっか。忘れてた。そうしとけば昨日みたいな行き違いはないんだよね」
言われて優香は戸惑った。
「わたし、ケータイ持ってないから……」

周囲に持っている人が少なかったし、親からのお小遣いで通話料とか払えそうにないから、ねだったこともなかった。あこがれてはいたけれど。

「そうなんだ。じゃあ、番号とメアドだけ教えてあげるから。寮の共用電話があるよね？」

暁彦は手帳に番号を書き付けると、優香に差し出した。

「じゃあ、僕のも」

夕樹が横から手を伸ばして、さらに書き加える。

「サービスで青龍のとイサキのもつけとこう」

背後で青龍が嫌な顔をしたが、夕樹はまったく気にしない様子で全員の電話番号を書き込んだ。

「もしケータイ買ったら、番号おしえてね」

優香はなんとなく、その一枚のメモ用紙が、彼らの仲間に入れてもらえるチケットのような気がして、大きく頷いた。

その日、寮に帰り着いたら、荷物が届けられていた。

昼間のうちに直接誰かが届けにきたのだという。中にはかっちりした楷書で書かれた手紙が入っていた。

「……篠田さん？」

部屋に戻って箱を開けると、真新しい携帯電話が入っていた。

『僭越ながら、携帯電話が必要になるのではないかと思い、お届けさせていただきました。そちらの校則では、授業中に使用しなければ所持は認められているとのことです。なお、私の電話番号とメールアドレスを登録させていただいておりますので、何かありましたらこちらにご連絡をいただければと思います』

篠田は優香が携帯電話を持っていないことを知っている。今までの友達と離れた暮らしに、電話が必要になると察してくれたのだろうか。

メール、してもいいんだろうか？

優香は慣れない手つきで何とか短いお礼の文章を書き込んで、送

信ボタンを押した。
間を置かずに返信は返ってきた。
『無事に受け取っていただけたようで何よりです。お友達はできましたか？』
優香は思わず、はい、と呟いた。
自分は幸せだと思う。両親を亡くして一人になった、と思ったけれど、ひとりぼっちにはなっていないのだから。

第二章　1

『おじさま、お加減はいかがですか。
学校にもだいぶ慣れてきました。
先日は校外活動という授業がありました。学校に来た依頼に応じるという授業なのですが、Dグループは駅前商店街の書店の万引き対策がテーマだそうです。
リーダーの早見夕樹くんは犯罪心理学のコースを取っているそうなので、犯人の行動を予測した棚の配置を決めて、書棚を作り替えました。
デザインは南暁彦くんが担当して（服飾デザインとかが得意なんです）、殿田イサキくんと三宮青龍くんが模様替えを担当しました。見かけによらず、殿田くんは力仕事が得意です。びっくりしました。
三宮くんはとても几帳面で、本の順番を全部覚えていてきっちりと並べ直していましたから、店長さんからぜひ卒業後に来て欲しいとスカウトされていたりして。
本棚の高さを低くしたり、見通しをよくしたりしたので、悪いことをしにくいようになったと思います。万引きというのは、本屋さんの経営まで危うくするんだと、早見くんがわかりやすく教えてくれたので勉強になりました。
グループ活動というのは、それぞれの特技がよくわかるというのを感じました。
飼育係も慣れてきました。ちゃんと動物たちは言うことを聞いてくれるようになったので、あだ名をつけてあげることにしました。一号とか二号とか、そんな味気ない名前はかわいそうなので。
そういえば、篠田さんが携帯電話を届けて下さいました。おじさまが料金を負担して下さると伺いました。お礼が遅くなって申し訳ありません。
同じグループの人たちが、メールアドレスを教えて下さったり、

グループ用のチャットルームを作ってくださったので、寮に戻ってからもお話ができてとても便利です。
もうすぐ期末考査があるそうです。おじさまの病状に障らないようにがんばります。
東雲優香より』

「先月分のポイントランキングにより、Dグループは栄えある学年最下位になったそうでー……。飼育係をさらにもう一ヶ月承ることになったよ」
夕樹が力なくそう宣言した。
ちょうど青龍以外のメンバーがそろっていた。
思わず優香は大喜びしてしまいそうになって、他のメンバーのため息に気づいた。
飼育係の仕事の分だけ、課外の選択科目の授業が受けられなくなるし、部活動にも行けなくなるからだ。
優香はさほど多くの科目を採っていないので、影響はないけれど。
「でもね。今回のランキングで希望が見えてきた。最下位だけど、一つ上のAグループとのポイント差が大きく縮まってるんだ」
「あー。それわかる。最近あいつが珍しく協力的なんだよ」
イサキがにやりと悪戯っぽい顔で笑う。暁彦も頷いた。あいつ、というのがこの場にいない青龍だというのは見当がついた。
「だよねえ。前は割と『出てきても何にもやんないぞオーラ』が出てたからな」
「やっぱ女子がいると、格好つけたいお年頃じゃないんですか？ってオレらも同じようなもんだけど」
そう言って優香に目を向ける。
「え？」
「差別とかじゃなくてね。女の子がいると、がんばっちゃう生き物なんだよ。男って」
夕樹がへろんとした口調で言う。

第二章　2

「そんなわけで、このいい感じの点差をさらに縮めるべく、期末テストでの赤点を減らしてポイント稼ぎをしたいと思います。本日から飼育係のあとで、勉強会を開催しようと思います。青龍にもさっき話しておいたから、コレ決定ね」

夕樹が自分で拍手しながら言う。

「そういえば、青龍は？」

「なんか家に呼び出されたって、ご機嫌ななめだったよ。夕方には戻るってさ」

「あいつんちって、家庭の事情面倒くさそうだなあ」

イサキがそう言いながら、自分の席に座る。

「まあ、人それぞれだろうけどさ。うちなんて髪染めただけで包丁もって追っかけ回されたしさー」

暁彦がなだめるように言う。髪を明るい茶色にしているが、その裏にそんな事件が……。

優香が驚いていると、暁彦は歯を見せて笑う。

「あはは。大丈夫だよ。オレんちってみんな武道の達人揃いなんだよね。だから、いろいろ頭が固いんだよ」

「何しろ暁彦の親父さんは空手の師範。兄貴も姉貴も空手の世界チャンピオンって家だからね。イベントに来たときに会ったけど、眼光が普通じゃなかったね」

「オレが服飾デザインやりたいって言ったら、空手をしないのなら家から出て行けって言われたんだよねー」

暁彦はえへら、と笑う。

「へええ。オレんちはフツーの公務員だから。体力有り余りすぎて家のあちこちぶっ壊したから、思いっきり暴れられる学校がいいって言ったら、ここを勧められたんだよな」

「あはは。イサキらしいっちゃらしいと思わない？」

暁彦が優香を見た。
ああ、そうか。同じ寮でずっと暮らしている彼らはきっとお互いの事情を知っている。
何も知らない優香のために、それをわざわざ話に出してくれたのかも知れない。
夕樹がにこにこしながら、頷いた。
「まあ、みんな家ではもてあまされたっていうか。僕なんて陰が薄すぎるから家にいても存在を忘れられるくらいだし」
「青龍は何にも話してくれないんだけど、どうも家と折り合い悪いのか、家がらみの話題はしない方が良いよ。機嫌悪くなるからね」
「そうなんだ……」
というか、機嫌がいいのを見たことがないような気がするけど。
青龍は大抵話題に入って来ることもないし、チャットでも入室してきてもずーっとＲＯＭるという有様だった。
いつもつまらなさそうに外を見ている。
この学校の生徒は自分の特技を認められて入ってきているので、とてものびのびしている。なのに、青龍だけはつまらなくてしかたない、様子だった。
それを見ていると、優香はどこか胸の奥につかえるような気持ちになる。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2519y/

あなたに届くまで

2011年11月24日21時00分発行